

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 <sup>チェ</sup> 崔 <sup>テーファ</sup> 泰和

本論文は、江戸時代後期の人情本の代表的作者である為永春水(1790～1844)の作品の特質を、その同時代性のあり方を中心として様々な方向から考察し、明らかにしたものである。本書の構成は、第一章「春水人情本と「流行」が「不易体」と「流行体」等の二節、第二章「春水人情本の構成—いわゆる春水流について—」が「段」と春水流の「段取」等の四節、第三章「春水人情本の周辺」が「松亭金水の人情本における「伏線」—『<sup>てまりうた</sup>毬唄三人娘』を中心に—」等の四節からそれぞれ成る。

第一章は、春水人情本の恋愛の場面や、登場人物の服装についての描写を詳細に検討して、その描写が当時の流行に細心の注意を払っていることを豊富な挙例によって明らかにし、また作中に書き込まれ、作品に同時代性を添えている商品広告に注目して、それが商品の単なる宣伝にとどまらず、作品にリアリティを付与し、また場面転換のきっかけにもなっていることを指摘して、春水人情本が同時代性を先鋭に打ち出し、かつその同時代性を小説構成にも活用した「流行体」の作品であることを鮮やかに論証する。

第二章は、春水人情本の構成技法を具体的に検討し、春水作品の各場面は「段」と呼ばれ、歌舞伎の各場面を意味する「段」の影響を受けていること、各「段」を組み合わせる行く「段取」については、作品の一続きの単位である一編の途中であえて中心となる登場人物を交代させて「段」を変える複雑な構成を取ること、また春水作品の本編と続編の関係について、本編に描かれる一つの「段」の前後に当たる話をふくらませて続編としてつづる「抜書」の手法が使われていることなど、構成技法に関わる重要な新見を提示する。

第三章は、春水と同世代や後続世代の人情本作家の多数の作品と比較しながら、松亭金水の伏線の方法は春水から示唆を受けていること、「人情」を人間本然の性の意味で用いた鼻山人に対し、春水は人間性の中で善と見なすべきものという意味で用いていること、後続作家の山々亭有人の作品が、流行の記述から登場人物の性格、また「段取」の技法まで、春水人情本から大きな影響を受けていること等を周到に論じる。

従来、春水人情本研究は、若干の注釈的研究や成立論的研究を除いては、ほとんど進捗していなかった。本論文は、春水の膨大な作品のみならず周辺作家の作品をも丁寧に読み込み、春水作品の濃厚な同時代性を支えている小説技法を初めて明らかにしたところに大きな意義がある。「抜書」の方法と講談との関係等、さらなる検討が望まれる箇所もあるが、春水人情本の特質と歴史的な意義を豊富な資料と緻密な考察によって明らかにしたことは、人情本研究に新生面を開くものとして高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断した。